

百花繚乱 —華麗なる花の世界—

山種美術館（渋谷区・広尾） 2021.04.10～06.27

「山種美術館」の開館 55 周年記念特別展として開催される催事は、近現代の日本画を中心に、春夏秋冬それぞれの季節を感じさせる「花」を描いた約 60 点の絵画で構成されている。「横山大観」「山口蓬春」「小林古径」「速水御舟」ら名だたる画家たちの「花」に寄せるまなざし、創意工夫に満ちた表現のほか、四季を揃える伝統を受け継いだ「田能村直人」「荒木十畝」らの作品が持つ歴史的背景なども紹介され、日本の画家たちが描き継いできた絵画の魅力を堪能できる。

<本展の見どころ>

1. 華麗なる花の絵画が大集合し、画壇を牽引した画家たちの描いた花の競演。
 2. 個性豊かな花の表現に注目。作品や花への想いを語った画家自身の言葉を交えながらそれぞれに趣向を凝らされた花の絵画の魅力を解いている。
 3. 「百花の王」とされる東洋絵画で伝統的に描かれてきた牡丹の作品を紹介。
- 荒木十畝（あらかじつぽ） 《四季花鳥》1917年 絹本・彩色 左・中図



春は白木蓮・椿・レンギョウ、夏は桐・葵・野萱草、秋は楓・アラカシ・竜胆、冬は薄雪の中に梅・青木など、色彩豊かな式の情景に折々の季節と鳥をあしらって四幅の画面に仕立てられている。何れの作品も**色彩が非常に鮮やかで、草木花の描写は単純化で装飾性が強く打ち出されている**のが大きな特徴である。

奥村土牛（おくむらどぎゅう） 《初夏の花》 1969年 紙本 彩色 右図

「土牛百遍」という言葉があるが、これは土牛が成功を収め、作品を求める人が増えるなか、その作品を手に入れるには、百回は画家のもとに足を運べという意味で、画商の間でささやかれた言葉であるとされている。画伯の作品は、完成しているように見えても、決して満足することなく何時までも描き続けるため手放さなかったことで知られている。